

西洋中世学会第8回大会シンポジウム

「西洋中世の〈知的中心〉としてのパリに、何が生じていたのか」

報告要旨

2016年6月12日（日）11時～16時30分

趣旨説明（11時～11時10分）

コーディネーター：岡崎敦（九州大学）

〈知的中心〉としてのパリというテーマは、一見自明に見えるが、そこでは歴史現象、あるいは研究状況の双方において、複雑な諸問題が提起されるように思われる。

パリは、たとえばローマのような強烈なトポスではなく、11世紀以前はフランス王国においてすら単なる地方都市以上の存在ではなかった。他方、〈知的中心〉の中身としておそらく想定されている大学、ゴシック、ポリフォニーなどは、中世盛期以後のヨーロッパ独自の文化現象であるにせよ、それが特に「パリの」であるのかどうかについては議論がありえる。このような状況にも関わらず、パリが「西洋中世の知的中心」と見なされるのはなぜなのだろうか。あるいは、かりにそのようにみなされる諸要因がパリにあったとしても、その具体的な内実、形成過程等に関し、パリは、どのような個別の性格を示しているのだろうか。

このシンポジウムでは、スコラ学、ゴシック芸術、ポリフォニー音楽、都市文学、大学制度など、しばしばパリと結びつけられて論じられる諸現象について、主として12から13世紀前半、つまりパリが突然の繁栄を見せ始めた時代を対象に再検討する。ここでは、一方では、「知の発展段階論」的思考からは提起されにくい諸論点が、他方では、「知的中心」を構成する諸要素の特殊パリの性格が再吟味されよう。

このような研究視角は、他方で、「ゴシック＝スコラ学的精神」などとやや安易にパリに結びつけて語られる諸問題の再検討とともに、研究のあり方自体の脱構築をも要請することとなるだろう。なぜなら、西洋中世学の各領域において、20世紀後半以降確認される問題関心と方法論の刷新状況が、ステレオタイプの歴史観の見直しを招来させているからである。中世文明の標章の一つである「〈知的中心〉としてのパリ」は、この点においてもまた、〈知的中心〉的テーマなのだろうか。

第1報告（11時10分～11時40分）

Epistolae duorum amantium とアベラール、そしてエロイーズ

永嶋哲也（福岡歯科大学）

本報告では *Epistolae duorum amantium*（以下 *EDA* と略記）について取り上げたい。これは1974年に Ewald Könsgen によって校訂され出版されたもので、学識ある若い女性と彼女の

恋人でもあり教師でもある学者との往復書翰の抜粋である。クレルヴォー修道院に保管されていたその写本は、シトー会修道士 Johannes de Vepria によって 1471 年に書写されたとされる。Könsgen は、書簡が本物で、書かれた時期は 12 世紀前半、地域はイル・ド・フランスだと推定し、アベラールとエロイズの交際初期の頃の書翰である可能性を示唆している。この示唆に対して中世文学の碩学 Peter Dronke は、これらの書簡がアベラールとエロイズの手によるとは思えないというような意見を 1984 年に述べた (P. Dronke, *Women Writers of the Middle Ages: A Critical Study of Texts from Perpetua to Marguerite Porete*, Cambridge U.P., 1984)。だがアベラール研究者の Constant Mews が、EDA がアベラールとエロイズによるものだと主張し、この書簡集に詳細な解説を付け英語との対訳にして 1999 年に出版した (C. J. Mews, Neville Chiavaroli, *The Lost Love Letters of Heloise and Abelard: Perceptions of Dialogue in Twelfth-Century France*, Palgrave Macmillan, 1999, 2nd ed 2008)。さらに Mews は同様の立場から 2005 年に二人の評伝を記し (C. J. Mews, *Abelard and Heloise (Great Medieval Thinkers)*, Oxford U.P., 2005) エロイズがアベラールに思想的影響を与え、彼女の発想が彼の晩年の思索において結実したと主張している。このような著作の著者同定を論じる場合どうしても思想内容についての吟味が必要になるが、Mews は議論の主戦場を意図的に (戦略的に?) 思想史領域へ持って行こうとしているようにも見受けられる。もちろん本報告は、このような真正判断や著者同定の最終判定を目指すものではない。むしろ著者問題を整理して最終判定が困難なことを示し、さらに EDA が有する潜在的意味について考察したい。

第2報告 (11時40分~12時10分)

リュトブフの仮構された「私」によるパリ

高名康文 (成城大学)

リュトブフの作品から推測される詩人の生涯は以下の通りである。シャンパーニュ地方からパリに出てきた学生が、パリ大学神学部と托鉢修道士との対立における後者の行状を、清貧を説きながら富と権力を握ろうとしているとして、言行不一致を非難するような俗語の詩を書く。放浪学生のご他聞に漏れず、博打と酒に溺れる生活のせいで、身をもちくずす。結婚に失敗し、眼病を患い、素寒貧になると、友だちはみんな離れていく。人の悪口を言いすぎたせいだと反省をして、聖母マリアに神へのとりなしを祈る詩、救われた人を描く聖人伝、聖史劇を書く。新たにパトロンを得て、十字軍詩では、王公の挽歌を書く。しかし、新王フィリップ三世にあてた最晩年の詩では、「パリにいて、あらゆる財宝に囲まれてはいますが、私のものはなにもないのです。」とパンも買えない窮状を訴えている。

以上の実人生らしい情報は、ファラルとバスタンによる校訂本で「不幸の詩」に分類される作品によるが、1950年代のズムツールにはじまり、レガラド、ザンクラに続けられた研究では、これらの詩における「私」は、例えば愚か者がいかに悲惨なめにあうかという教訓を与えるために持ち出される、仮構された「私」だということになった。ズムツールは、12世紀のトルバドゥール、トルヴェールの「歌 (=chant)」における「私」が、たとえば至純の愛の概念を体現する普遍的抽象の「私」なのに対して、13世紀パリにおけるリ

ュトブフの物語詩 (=dit) の「私」は、作品の目的を達成するための逸話的でいわば類型的な「私」であるとした。ザンクが文学における主体の萌芽を見いだすこのような「私」には、都市に生きる学生、芸人としての詩人という類型が生きた現実が反映されていると考えるべきであろう。

以上のような研究史をさらに整理しつつ、リュトブフの仮構された「私」によるパリを作品に即して論じられるように準備していく。

第3報告 (13時30分～14時)

初期ポリフォニーとパリ派オルガヌム

平井真希子 (国立音楽大学)

パリ派オルガヌムは「ノートルダム楽派」の通称で知られ、ペロティヌス、レオニヌスといった作曲者名が伝えられていること、モード記譜法の採用によりある程度リズムが推測できること、グレゴリオ聖歌の個々の音を長く引き伸ばした上に複雑な上声部が構成される壮大さを持つことなどから、音楽史上初期ポリフォニーの頂点として扱われてきた。本報告では、より古い時代のポリフォニー楽曲群との比較を通じて、パリ派オルガヌムの音楽上の特徴や作られた背景を再検討する。

聖歌に対旋律を加える初期の試みは、9世紀以降音楽理論書や楽譜に残され13世紀頃まで「オルガヌム」と呼ばれていた。その様式は時代ごとに大きく3つに分けられ、各々の代表的な楽譜資料として1) ウィンチェスター・トロース集 (11世紀)、2) アキテーヌのポリフォニー写本群とカリクストゥス写本 (12世紀)、3) パリ派オルガヌム諸資料 (13世紀) があげられる。

ウィンチェスター・トロース集では、典礼の様々な部分を多声化の対象としており、そのレパートリーには地元の聖人を重視するなどの特徴が見られる。記譜は譜線なしネウマのため音高は確定できないが、そこに様々な文字符号などを加えて音の動きを示そうとする工夫が見られる。アキテーヌのポリフォニー、カリクストゥス写本では、音高を正確に示す記譜法が採用されるようになる。

一方パリ派オルガヌム諸資料では、一部の楽曲でリズムも推定可能になり、音符も角型ネウマを採用するなど記譜の客観性が増している。レパートリーは教会暦上重要な祝日を網羅しており、ミサでは昇階唱とアレリヤ唱を組織的に多声化している。2声オルガヌムの上声部の楽曲分析では、特定の音域内で動く「聖歌枠組構造」に装飾的な動きを加えたものとして理解可能である。パリ派オルガヌムの歌唱は金銭的報酬を伴う技能として扱われていた形跡もあり、個々の祝日の意義を離れて「鑑賞」の対象となっていたと考えられる。

第4報告 (14時～14時30分)

パリとゴシック様式の形成

木俣元一 (名古屋大学)

13世紀中期以降、ゴシック様式の宗教建築は、一目でそれと認識できる特徴的な指標を担った大量の建築的・装飾的要素を効率的に建造現場に供給できるよう、そのデザイン及び生産システムを根本的に変化させながら、フランス王の宮廷が居を構えた首都パリを発信源として、フランスのみならずヨーロッパ各地に急速に拡大していくことになる。他方、時代をさかのぼって、ゴシック様式が形成されたと一般に考えられている、12世紀中期から後半にかけてのパリ、そしてパリを中心とする周辺地域において、実際にどのような現象が起こっていたのかについては、近年根本的な問い直しの対象となっており、ロマネスクからゴシックへの転換という中世建築史および美術史においてとくに重要とも言える事件の本質が、さまざまな角度から再検証されようとしている。

本発表では、このような再検証の動向に焦点を絞り、当時のパリとその周辺における美術の状況を概観した上で、以下のような4つの問いかけを中心として、研究の現状を簡潔に整理しつつ報告者なりの展望を提示したい。(1) 11世紀後半から12世紀後半にかけての「ロマネスク」と総称される美術と建築が初期ゴシックへ向かう展開の中で、パリ及びその周辺地域が占めていた位置をどのようにとらえたらよいのか。(2) 一般にゴシック様式が芽生えたとされている、1140年前後に進められたサン＝ドニ大修道院聖堂の改築事業において、大修道院長シュジュールはどのような役割を果たしたのか、また彼が目指そうとした、建築や美術を包摂する全体的な方向性・志向性はどのようなものであったのか。(3) パリ、ノートル＝ダム大聖堂の12世紀後半から13世紀中期に向けて建造が進められた部分に関する様式論的分析が、ゴシック美術・建築の中心としてのパリという都市の形成の問題と、どのような関連づけのもとで論じられるべきなのか。(4) このような問い直しの過程において、ゴシック、さらにはロマネスクという様式概念自体の理解がどのような変質を遂げることになるのか。

第5報告 (14時30分～15時)

「形成期のパリ大学における教育環境 —研究史再考」

岡崎敦 (九州大学)

アベラールの到来以前は、知的にはもちろん、政治、経済的にも地方の小都市に過ぎなかったパリが、百年後には、西洋の〈知的中心〉とみなされる発展を遂げた事情には、実は、不明な点が多い。かつての研究は、パリの知的繁栄を当然の所与と見なした上で、団体としてのパリ大学形成に至る道を、いわば自然な発展過程として辿ろうとしていたが、20世紀末以降、12世紀後半から13世紀前半の状況を、より複雑で、緊張関係に満ちた過程として再考する研究が多く現れるようになった。結果として、パリ大学形成の意味自体もまた大きな再検討にさらされている。

事実、12世紀後半のパリの教師、学生たちは、多くの教会人から激しい批判を浴びていた。また、1200年頃の教師、学生集団は、エリート教会人の巣窟から成る神学者たちと、有象無象の貧乏教師、学生が少なくなった自由学芸関係者の対立など、一枚板とは到底言いがたい状況にあった。さらには、形成期のパリ大学を代表して団体化への道筋をつけたのは、イタリア人あるいはイタリア帰りの外国人からなる集団であつたらしい。

他方、パリ大学に対する外部権力の関心や立場についても、大学に好意的なものとは言

いがたい諸条件がいくつも指摘される。フランス王権は大学に無関心である一方、教皇は大学の自由などをそもそも眼中にはなかった。都市パリの市民たちは、地元出身者がほとんどいない余所者ばかりの大学関係者には、むしろ治安攪乱者として猜疑の目を向けていたのである。

最後に、このような研究の観点の変容の背景には、中世史研究の問題関心と方法論をめぐるさらに大きく深い変容があるようにも思われる。発展段階論であれ、文明論であれ、なんであれ「本質」とされる精髓のみに関心を集中させる関心から、特定の歴史状況のより細かな理解への移行が見られるのである。この報告では、主として、これらの新しい見方のいくつかを紹介するとともに、研究史自体の再検討も試みたい。